

## 【第8分科会】

# 学習センターとしての機能を推進するための取組

## 1 発表の要旨

### 『図書館を活用した読書活動の広がりを目指した取組 羽賀 正道』

中学生の生徒に向けた多読、図書館の活性化の取り組みについて、「読書マラソン」として家庭も巻き込みながらの実践を紹介していただいた。例えば、

- ・まだまだ読みを広げられない生徒も多く、明治以降の文学者を書き出し、配布をした。
- ・「お宝発見プロジェクト」として教職員や保護者の推薦文を入れたお勧め本リストを配布した。
- ・学年文庫を各学年の教室前に30冊程度のカラーボックスを置いたことで、生徒が本を手取るようになった。
- ・文学史リストの本を書架に集めてもらうなど、司書補との連携を図った。

などである。今年始めたばかりで、まだまだうまくいっていないが、利用状況は倍増しているということであった。本を手にとってみようとした生徒が増え、生徒に働きかけるだけ、効果は表れる。しかし、読書好きな生徒が増やただけなのか、見極めが必要である。新潟県研究大会では、上越教育大学の先生より興味深いデータを示唆いただいた。「学力」と「読書」の日米比較では、読書は、学力向上に影響がないということ。また、本とマンガを両方読んでいる方が、学力が高いということであった。多読より、1冊をどう読むか、我流ではなく、考えながら読むということが学力向上において重要だそうだ。

学習センターの機能として、全ての図書をそろえるには制約がある。調べ学習はネットが主流になっていくだろう。おばあちゃんの知恵袋や地元の記事はネットに載りにくい。だからこそ、図書館でそろえたい。そうしたことが、学習センターとしての機能になるのではないかということであった。

### 『学習センターとしての機能を推進するための取組～図書館を活用した 子どもがわくわくする探究活動とは 小林 裕美』

授業実践からの図書館活用のアイデアを紹介していただいた。須坂市立井上小学校では、校舎の

隣に地域図書館があり、必然的に本と触れ合う環境が整っている。また、朝読書を週1～2回、保護者の読み聞かせ、PTAによるお話の会（劇やペープサートなど）などがあり、読書好きな子どもが育っている。しかし、自分の追及したい課題に対して、どの情報をどう活用するかを考えながら図書館を活用する体験は不十分であった。そこで、子どもがわくわくする探究を目指し、教材研究や図書の選定、めあての掲示、分かりやすい板書などについて研究を進めてきた。1年生国語（上）「くちばし」では、「動物クイズを作ろう」という課題について、「見る見るめがね」という物を使うことで、どれをクイズにするか、アップにする部分を決めさせた。答えになる文章も、本の中で考えさせるようにした。また、1年生国語（下）「自動車くらべ」では、「自動車カルタをつくろう」という課題を設定し、カルタの札を増やすということで、進んで図鑑を読み込む様子が見られた。いつでも読めるように本を置いておいたことがよかったそうである。これら2つの実践から、クイズ大会やカルタ大会など目標があったこと、「見る見るめがね」でのクイズにしたいことが焦点化されたことなどが、成果として挙げられた。しかし、課題としては、図鑑は子どもたちにとって、情報量が多いということ、それらたくさんの情報から必要な部分を焦点化する工夫が必要なこと、年間を通した図書館利用を考えていく必要があることが挙げられた。

### 『図書館を有効に活用しながら学力を高める子ども 日比野 馨』

学校図書館が、学ぶ場になるための取り組みについて紹介していただいた。長野市立湯谷小学校では、クラスで使える図書館の時間があったり、学校司書の先生に読み聞かせをしてもらったりと、本に親しんでいる。子どもたちにとって図書館は好きな本が読める場所であった。5年生の米作りでの子どもたちの様子から、知りたいことや明らかにしたいことがあったら、図書館は新しいことや学力を高める場になること、学ぶ場としての図書館にあらためて気づかされた。そこから、子どもの基礎基本の学力差によって学びの質が左右さ

れること、教師自身の図書館の知識、学ぶ場としての図書館のあり方などが課題として挙がってきた。そこで、「図書館を有効活用しながら学力を高める子ども」という研究テーマを設定した。

それぞれの学年での実践から、子どもと図書館を考えたとき、一人一人の子どもがどんな思いで図書館にやって来て、図書館で学ぶことで子どもたちにどんな学力をつけることができるかを考え、図書館を活用する学習場面を構想しなければならない。また、図書館と関わることで、もの・ひと・ことに親しみ、それぞれと関わりを深めていくきっかけになるという場になりうるということ。そして、図書館を有効に活用できるようになるために、子どもたちに図書館の知識をつけることも必要であり、図書館を整備することが大切である。そうしたことが、図書館が読書を楽しむ場から、ひと・もの・こととつながる協働的・対話的へとなっていくのだろう。昨日の公開授業では、図書館で自分が知りたい情報を探すことや、学校司書の支援の様子を見ていただいた。子どものふりかえりでは、子どものがんばる様子が見られた。今後も引き続き研究していきたい。

## 2 協議内容

3人の先生方の発表について質疑応答があった。

- ・「自動車くらべ」では、図鑑を統一したとあったが、いろいろな種類のセットのものを学校司書は用意していたが、どのような本を集めればよいのか教えてほしい。選書のときに助かる。

→「つくり」と「しごと」が載っているものを探した結果、同じシリーズ本を統一して用意した。

1人1冊わたるようにすると、学校だけではそろえられないので、近隣や地域の図書館で借りた。統一した方が、指導の面でやりやすかった。

- ・図書館年間指導計画について、どのように市から本を借りているのか。市立図書館との連携について教えてほしい。

→学習に必要なものを市立図書館で司書の先生が集めてきてくださる。休みの日に担任が借りに行くこともあるが、学校と地域の図書館を効率よく使う方法を考えていきたい。

その後、市立図書館との連携について多くの先生から紹介をしていただいた。自治体によって学校と市立図書館の連携に意識の差が感じられた。ネットワークでつながり、市立図書館で借りられ

るところがある。ネットワークでつながっていないところは、公民館と学校の担当を市立図書館に作っているところもある。学校が自治体に働きかけ、自治体を動かしていく必要があるという意見も出された。また、司書同士のつながりも大事であり、学校同士も貸し借りができるようになっているところもある。

その後、グループ協議が行われた。読書と目には見えない学力や人間性の関係は数値化されないが、意味のあるものであり、取り組んでいかなければならないと感想を話された。



## 3 指導助言

須坂市立須坂小学校教頭の金井直樹先生より、発表から学びたいこと、新学習指導要領から利用指導のあり方について指導助言をいただいた。読書週間の確立と並行して学習センターとして整備することの大切さ、しかし子どもたちにとってたくさん情報を整理することの難しさがあること。全国学力調査から読書好きで学力が決まるわけではない。しかし、図書館へほとんど行かないのでは、明確に違ってくる。また、分からないことがあったら自分で調べると答えた子どもの学力は高いということから、学習センターとしての機能を推進していかなければならない。まずは、各校、図書館年間指導計画を作ってほしい。担任、司書教諭、学校司書、それぞれの役割を意識しながら連携を進め、子どもたちの調べる力を伸ばしてほしいという内容であった。

